

3、4回落選をすると、「審査員が俺の作風とは合わないのだ」「審査員を沢山だす会に所属する人ばかりが入選するんだ」「日展に所属しない有名な作家も沢山いるよ。日展ばかりが絵描きではないよ」などと言って「日展」を諦める人が多いのです。

私の周りにも「日展などへ応募するための費用などは金をどぶへ捨てるようなものだから俺は応募しないよ」などと言って日展へは応募しない人も沢山おります。私の周りで日展を捨てた人で大成した人を知りません。やっぱり臥薪嘗胆、己の怠け心に勝ち努力を積んだ人が 勝利の美酒を手に入れるのだと信じております。

人間の4期 即ち「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」のうち「家住期」に於いては わき目も振らず仕事をし、生活の糧を懸命に稼ぎ、家族を養いました。家族が独立し己も年をとり 現役を離れて「林住期」へ移って20年、「林住期」に於ける己の峠であると目標を定めた「日展入選」にやっと今、たどり着くことが出来たのだと言う達成感に浸っております。

「日展入選」などは大した峠ではないかも知れませんが、人それぞれにその人の人生にとって峠の高低はありましようから、己が満足すればそれで幸せであると思っております。

日展入選作「ポーズの合間」は三菱電機本社へ寄贈しました。この絵に先立って示現会奨励賞を貰った「画室のモデル」は 既に私の心の故郷「馬電」へ寄贈してあります。5年前に「中電」に寄贈した示現会展佳作作品の「椅子に凭れる」と併せ、3つの作品が 私一生の恩義ある働き場所の 三菱電機の関係場所で、安住の場所を得たことを心の底から嬉しく感謝いたしております。

もう一つ場所「MHK」へ来年にでも寄贈にふさわしい作品が出来て、しかもMHKが受け入れてくれるのならば是非寄贈をしたいものと思っております。

東京白山爺 神谷昭美

<馬電に寄贈された、示現会奨励賞作品「画室のモデル」は、馬電正面玄関に設置されました>

がんばってます！

上毛新聞(平成 23 年 10 月 31 日)

對比地誠二郎さん(82) 太田市中根町



自宅で月3回、土曜日に書道教室を開いており、地元の小生から80歳代の女性まで30人が通う。元気の秘訣は「年寄り

「年寄りぶらず、常に気持ちは若く」と、元気の秘訣を話す對比地さん



ついひじ・せいじろう 1929年、埼玉県深谷市生まれ。20年前から自宅で書道教室「誠会」を主宰。太田市宝泉南小の校章もデザインした。

書道や俳句で刺激

「四十の手習い」で書道を始め、会社勤めをしながら10年かけて師範の資格を取った。定年後は

「霞洞」の雅号で俳句も詠む。多彩な趣味を持ち、体を動かし、外に出て刺激を受けながら日

の日は毎日40分歩いてお

軍が引き揚げた後は、旧

尾島町の三菱電機群馬製

作所に勤めた。

書道は三菱時代、定年後の趣味にと始めた。教室では墨汁は勧めず、子

々を楽しんでいる。

ともも大人も硯で墨をすり、心を落ち着けてから手本と向かい合う。「うまい、下手ではなく、書き出しと止めの大切さ、濁音の小さな点一つもおろそかせずに、きちんと書くことを教えている」

パソコンを使う機会が増え、筆で文章を書く機会は減ったが、「書は日本の文化。元気がうちはしっかり伝えていきたい」と笑顔で話す。百薬の長の晩酌は焼酎なら1合、日本酒なら1合半にとどめている。

